

「文化財指定と社会的効果」プロジェクトの活動について

山 崎 健 司（日本古代文学）

私どもは、県庁文化課と共同で、平成16年度から「文化財指定と社会的効果」のテーマを掲げ、学生有志の協力を得ながら事例調査を重ねてきた。これは「史跡」「伝統的建造物群」などの指定を受けた文化財が、どのような教育的効果や経済的効果を上げているか、具体的事例の研究を基礎に一般的原理や成功に導くための体系化を探ることを目的として行われている全国都道府県・指定都市文化・文化財行政主管課長協議会（全文協）九州ブロックの調査研究に協力する形で進めてきたものである。初年度は「肥後古代の森（菊水・鹿央・山鹿）」、昨年度は「三角西港」について調査を行い、最終年度の18年は9月9～10日に三角、28～29日に今回新たに鞠智城も加えて古代の森を再訪、これまでのフィールド調査をふまえつつ「文化財の活用」について考え合った。

これまでの活動について報告しよう。初年度は県の北部に位置する「肥後古代の森」。菊水地区には日本最古級の文字を象嵌した大刀を始めとする副葬品（いずれも国宝）の出土で知られる江田船山古墳など多くの古墳があり、山鹿地区には鮮やかな装飾壁画で知られるチブサン古墳と、この地域の考古・歴史資料を多数展示する山鹿市立博物館がある。さらに鹿央地区には古代の森の中核施設である県立装飾古墳館があり、通常内部に入って見ることができない県内の装飾古墳のレプリカが副葬品とともに展示されている。これら3地区について、それぞれの史跡と周辺施設を見学、印象に残ったこと、気づいたことを参加者一人一人がカードに記録し、協議の場で問題点を語り合った。この内容は、文化課を通じて肥後古代の森協議会にも報告されている。2年目は宇土半島の尖端、天草への入り口に当たる「三角西港」。明治時代に造られた官営の日本3大築港の一つで、オランダ人技師の指導のもと、当時の優れた技術の粋を集めて成った石積埠頭が現在も残っているのはここだけと言われ、国の重要文化財に指定された、熊本の近代化を象徴する歴史的遺産である。この年度は9月と3月の2回実施し、9月にはまず行政側と民間側から今日までどのような取り組みを行ってきたかを関係者から聞き、三角の見どころや隣の不知火町の松合地区の土蔵白壁建物群を案内してもらった。3月には2つのダ

ループに分かれ、一方のチームは観光客や地元住民にインタビューを行い、もう一方のチームはJRの駅のある東港から西港に向けて実際に歩き、注目されるポイントを書き込んだ周遊マップを作成した。なお、インタビューのデータを補強すべく、ゴールデンウィーク中にも再度アンケート調査を実施した。そして今年度、9月初旬に行った三角での活動では、過去2回の調査をまとめるべく、海の側から西港にアプローチし、明治時代の人々（ラフカディオ・ハーンもその一人）が海を渡って三角に下り立った気分を追体験した後、今日の観光客のニーズを考えて、滞在時間や目的に応じたプランづくりを行った。なお、この模様は平成18年9月10日の熊本日日新聞にも紹介された。一方、9月末に行った古代の森での活動では、後から「肥後古代の森」に加えられた古代山城・鞠智城も検討対象に加え、実際にグループごとに複数の史跡を取り入れたコースを選定、三角と同様、さまざまな世代や人数、滞在時間や目的に合わせたプランづくりを試みた。以下はその一例。

「肥後古代の森」ファミリー向け（1泊）コース

鞠智城—[(あんずの丘) または (一本松公園) または (水辺プラザかもと)]
—山鹿市内 (八千代座・豊前街道) 散策 (泊)—装飾古墳館・鹿央物産館—
江田船山古墳・民家村—(菊水IC・九州道経由)—熊本

「三角西港」文学コース (所要30~40分)

浦島屋—龍驤館—石積埠頭 (ハーンの見た風景に思いをはせる)

「三角西港」ベストビュースポットめぐり (所要30分~1時間)

ムルドルハウス—水路—法の館・海技学院—浦島屋 (2階テラスからの眺望)
—石積埠頭

ところで、本学の日本語日本文学科には、現在、地域文化に関わる授業科目として「地域文化研究Ⅰ・Ⅱ」があり、文化史的な内容を学ぶことができるけれども、文化財に関する科目はなく、プロジェクトに参加すること自体、学生にとっては多少の違和感を伴ったようだ。しかしながら、実際に現地に行ってみると、日常の学習とは違った観点から物事を見つめることが求められ、グループ活動を通してチームワークや社会に向けて発信する力がおのずと具わっていく様子も伝わってきて、思わぬ形で教育的効果を上げることもできた。

ここで参加者の感想を紹介しよう。

*

私はこの9月に県大と県庁文化課との共同研究に参加しました。大学3年だった

初年度から、県大を卒業して他大学の大学院に進学した今年度まで参加させていただきましたが、非常に得がたい経験ができたと思います▼普段は日本文学や日本語学について勉強しているわけですから、古墳などの史跡や博物館を訪れる機会はそうあるものではありません。しかも、ただの観光客としてではなく、「一観光客としてここを訪れた場合、どんな所に魅力を感じるだろうか。また、改善すべき所はないだろうか」などと考えながら、さまざまな場所を巡るのです。家族連れにはこんなコース、年輩の方にはこんなプラン…、そういったことを試行錯誤しながら考えていくことによって、ものの考え方や視野がより広がったような気がします。熊本に生まれ育った私は郷土の歴史や文化・旧跡について何となく知っているつもりでいましたが、意外と知らないことが多いということも分かりました。たとえば、熊本は全国一「装飾古墳」（壁画や文様のある古墳）の多い県であること、あるいは熊本ゆかりの小泉八雲が「夏の日々の夢」という三角西港を舞台にした美しい文章を残していること―。私は将来国語の教員を志望していますが、こうした郷土の歴史や文化に触れることは、教育に携わる上で非常に有益だと思います。また、小中学校などでの総合的な学習や社会科見学などを通して、早いうちから郷土について興味や関心をもつことの重要性も感じました。▼今回の巡見を通し、たくさんのものを得ることができました。何より印象に残っているのは、「知らなかった」「すごい」「面白い」という驚きや発見を多く感じたことです。大学の講義室では得られない新鮮な感動がありました。故郷の魅力や見所を他県の人にも伝えられるようになりたいと思うようになったのは、予想外の大きな収穫です。

(内田夏子・熊本大学大学院生・平成18年3月本学日文科卒)

*

私は最終年度の今年、初めて参加しました。実地調査では、「肥後古代の森」や「三角西港」などの歴史的・文化的な建物や施設について、良い点・悪い点など気づいたことをメモに取りながら回り、後にそれらの点を出し合ってまとめていきます。▼現地に到着すると、建物の外観はきれいで周りの景色もよかったです。中を回ってみると問題点も目につき、全体での話し合いではたくさん指摘されました。それは、蜘蛛の巣がかかるなどして掃除が行き届いていない、掃除用具など関係のないものが無造作に置かれている、展示物に統一性がみられない等々でした。一言でいうと当たり前のことができていないのです。また、休憩用の四阿にツタが延って風化している、案内板が無いもしくはあっても分かりにくいというような

すぐには改善が難しいような問題点もありました。全体を通して、折角いい資源があるのにもったいないという感想を持ちました。お金のこともあるでしょうが、人手が足りていないというのも原因の一つです。素材はいいのですから、手を加えればもっと魅力が増すはずです。この取り組みを通して、少しでも改善していけばと思います。▼更に、総仕上げとして散策のコースや観光のプランを、年配の方や子供連れ向けあるいは歴史や景観をメインとするテーマ別などに分けて考え、作りました。私はこの作業にはとても頭を悩ませました。その人の立場に立って考えることや、道順や所要時間、食事休憩の場所などを総合的に計算することの難しさをつくづく実感しました。しかし同時にいい勉強になったとも思います。▼私が印象的だったことはそこで働いているそれぞれの方が現状を把握し、そこを改善するための考えをお持ちだったということです。話を伺った店のご主人はその店の技術や伝統への誇りや今後の考えを持っておられたし、席を設けてお話して下さった館長さんもそこを有効に活用できるよう真剣に取り組んでおられました。私もそうして他の人に誇りを持って話せるように、もっと地元のことを知らなければいけないと思いました。▼問題点はありましたが、しかし、三角も山鹿も海や自然の風景が美しく、広い敷地を悠々と歩き、建物の中を見学するのはとても楽しかったです。今回の巡見では有意義な時間が持てました。また行ってみたいと強く思います。

(田上百合香・日文科3年次生)



巡見の様子

「肥後古代の森」については、一昨年の調査から今日までの間に、自治体の合併という大きな変化が生じ、その間の変化にも注目する必要があった。実際に現地を訪ねてみると、古代の森相互の連携を密にした取組は以前にも増して活発に行われており、それぞれの地区の写真や図版をふんだんに取り入れたロードマップが作成され、「古代への旅～家族で歩こう・肥後古代の森」という活動も実施されていた。前者は一般の観光客向けのガイド、後者は主に地元の子どもたちを対象に郷土の歴史や文化を学ばせる活動と言え、それぞれ成果を挙げている。

しかし、これだけ充実した文化財を活かそうとする活動が行われながら、なかなかきっかけが掴めないことも事実である。ロードマップは、現地に行かなければ入手できず、子ども向けの活動もターゲットは一定の範囲に限定されているように見受けられる。

一方、「三角西港」については、天草に向かう観光客が休憩に立ち寄る場所としての立地の良さが幸いして、集客面では成功しているように見えるものの、さきに紹介した学生の感想文からもうかがえるように、文化財に目を向けさせる工夫についてはまだまだの観がある。行政側からは自治体の合併後、予算面で厳しくなっているとも聞いた。

より広い視野でより多くの人々に文化財に親しんでもらえるようにするためには、個々の素材に磨きをかける努力を続けることとともに、それらの魅力を上手に発信していく工夫も必要である。今回の2地点における客層や興味の対象によって構成された周回プランは、そのための第1歩と位置づけたい。

なお、去る平成18年11月には、三角西港を含む九州・山口の近代化産業遺産群を世界文化遺産に追加登録するよう九州知事会が提案し、平成19年1月5日の熊日、1月18日の朝日新聞には、鞠智城跡の国営公園化を目指す動きを伝えている。これらは、より大きな枠組みの中における文化財の保存と活用に向けての取り組みだが、保存と活用は行政と民間の緊密な連携があって初めて成功するものである。このプロジェクトの成果は、両者のあいだを繋ぐものとして、今後、地元の商工会や旅行社、マスコミなどさまざまな関係機関に提案していきたいと考えている。

(追記) 1月29日の報道によれば、「三角西港」を含む近代化遺産群については今回の暫定リスト入りの選に漏れたが、継続審議となった。一方、今回リスト入りを果たした「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」については隣接県の事例を含めることについての検討が求められており、天草の教会群がこれに該当する。